

第1回 食と命の教室 2021.2.13

■初めに

みなさん、いろいろな考えをもって参加していることがわかりました。私もこういう教室をするのは、ある意味、遺言のつもりと思っています。

人間は変えられない事、選べない事があると思うのです。例えば日本で生まれた事。日本人でありアメリカ人では無いんですね。そういう意味で生死の場所を選べない。また、私は仏教徒なので仏道の話はしますが、お坊さんと話をして教えてもらったことですが、みなさん、塔婆の形の意味は知ってますか？あれは空、風、火、水、地なんです。これらは人がどうのこうのしたって操作できないものでしょ？大地があって生きられる。海の中では生きられない。宇宙の中で人の意思の及ばない中で生かされている、とお坊さんが教えてもらったんです。

先祖供養というのも、どれだけの遺伝子を先祖から頂いているのか？父母から命をもらって私がいる。父母はその上もいて、10代遡ると何人ぐらいになるか知っていますか？2, 4, 8, 16, 32人・・・と数えていくと、10代でおおよそ1000人いるんです。つまり1000人分の遺伝子を頂いてここに私の存在がある。我が家では先祖は元禄までたどれるのですが、300年、つまり10数代なわけです。

どういう事かという、私は1950年生まれ、親は1925年生まれ、ばあさんは1900年生まれ。私の息子は1975年生まれ、孫は2000年産まれ、と25年単位で我が家は系譜が繋がっているんですね。それで300年だと10数代は先祖がいるということになる。とにかく先祖がいて自分がいると思うと、風に吹かれて風葬式とかで良いとは私は思わないんですね。

例えば100、200年前はどうだったか？先人が積み重ねてきたものがあって我々の今がある。という事を忘れられない。近代はテクノロジーが発展して人間に牙をむいているような気がします。持続可能の時代かどうか自覚して生きていかなくはいけない、と思っています。そういう感じたことを伝える機会として、また現場を見ながら理解するきっかけになればと思います。

■食と命は表裏一体

この教室も今年で9年目。なんでこういう教室を始めようかと思ったかという、先ほども言いましたが私は1950年生まれ。ほぼ70年生きてきて、農業も50年やってきました。今、農業に関わらない人間はいないという認識です。というのも農と食は裏表だと思っているんです。

人間は食わねば生きていけない。外国の格言で「何時は食べた物そのものである」というのがありますが、その通りだと思うのです。お母さんのお腹の中にいる時からお母さんが食べたものが栄養となってお腹の子供に行くわけです。生まれた後もお母さんが食べた物を元に

しておっぱいが出来てそれを飲む。でありながら、今の人間社会はそれを失念している。それで良いのか？という思いがあるんです。

私の恩師が残した言葉で「人間は自然が無ければ生きていけない」というのがあります。地球は人間が無くとも生きていける。つまり、地球の方が上位に存在している。自然に生かされているという事を今の人は忘れてしまっている。

さっきも話した私の恩師の言葉で「人間は自然から離れたら人間らしくなくなる。自然を忘れると正しい歴史観を持たない」というのが私の中に強く印字されてはがせないんです。そこを物事を考える出発点にしているんです。

20歳の頃、「農業とは何だろう？」と考えていたんですが、世の中は高度経済成長の入り口。石油ショックもあった時代です。私の直感で「世の中、おかしくなっているな」と思ったんです。例えば、格家族は危険だ、と。それは歴史の断絶だと。

経済成長に従って東京だと多摩地区に団地が沢山出来た。千葉は花見川団地が大きいですね。そこで生協の前身で天然牛乳を飲む会というのがあった。知っていますか？どういうことかと言うと、1960年～1970年代で地方から首都圏に人口の大移動が起きた。首都圏に限らず中京圏とかね。ということは、地方の人が都会に住むということ。そして「東京の牛乳はおかしいぞ」となった。

当時、明治、森永、雪印の牛乳は牛乳じゃなかったんです。牛乳の主成分はタンパク質と脂肪で、脱脂粉乳をごちゃごちゃ混ぜて成分調整して作った物を牛乳として売っていた。しかし、地方から来た人は本物を知っていたんです。それで「こりゃ違うぞ！」となったんです。それが「天然牛乳を飲む会」で千葉は八千代牛乳、東京では多摩地区で北海道から取り寄せた四つ葉牛乳。人間の味覚は10代で決まる、つまり体験で決まる。田舎の人は子供の頃に本物を飲んでいたのでわかるんです。

で、「天然牛乳を飲む会」が始まった。当時、我が家も乳牛出荷をしていたんです。その関係で花見川団地の自治会さんが「本当の野菜が欲しい」となって、それで大栄産直会を作ることになって、週に1～2回野菜を持って行っておつきあいをし始めた。

その後、バタバタっと生協が始まった。東部生協の手伝いもしていたんですが、ビジネスに移っていったんですね。食べ物の本質では無く違う方に行ってしまったので縁を切ったんです。で、おかげさま農場を作るはめになった(笑)

私らは農業をやっているんだけど、社会的には、この国の嫌らしさというか差別が生じる。3K、つまりダサい、汚れる仕事をバカにする風潮があるんです。当時、仲間が国道沿いに畑があって仕事をしていたら、そこを通りかかった親子が「あんた、ちゃんと勉強しなかったらああなるわよ！」と言っているのが聞こえてきたそうなんです。そんな話をされていて「そんな人間に食わせるな！」ってね(笑)日本は差別社会になってしまったな。

私らの時代は、お互いの仕事に敬意を持っていたんです。人の嫌がる仕事をしなさい、と育てられたんです。

話を戻して、おかげさま農場をやっているけど、とにかく現場に来てどういう風に育っているか見て欲しい、というのを何年もやってきたんです。そして、もう1つの本分、作物を育てることについても体験してもらいたいと思っています。

■有機農業の原点

1964年、「※レイチェル・カーソン」の沈黙の春ですね。知っている？知らないんだ!?簡単に言えば海洋学者で視点が全然違うんです。「沈黙の春」は環境問題の草分けで、是非、読んで下さい。

「※レイチェル・カーソン」… 1907年生まれのアメリカの海洋学者。農薬で利用されている化学物質の危険性を取り上げた著書『沈黙の春』(Silent Spring)は、アメリカにおいて半年間で50万部も売り上げ、後の日本の有機農業農家に多大な影響を与えた。他にも『センス・オブ・ワンダー』など多大な影響を今も与えている本を書いている。

農薬は1920年ぐらいから始まって戦争で発達したんです。ヒトラーが毒薬を作って、今は殺虫剤とか言っているけど戦争の産物なんです。例えばアメリカがベトナム戦争に関わるようになって、なかなか勝てない。そのゲリラ対策で枯れ葉剤を作った。

戦争は国家がやるものでしょ？戦争が終わったらメーカーに残る。原発も核の平和利用と言うように、枯れ葉剤も農薬として地球上にばらまいた。そして枯れ葉剤もベトナム戦争の後に農薬が出てきたんです。

1960年ぐらいまでは農薬は私の周りには無かったんです。テレビとかでも見たことがあると思いますが「※DDT」をぶっかけられてシラミ、ノミを退治出来た。しかし、アメリカ社会はそれを善として、飛行機で真っ白になるほど振った。

「※DDT」…有機塩素系の殺虫剤。戦後、衛生環境の改善のためにアメリカ軍がシラミなどの防疫対策として用い、外地からの引揚者や、一般の児童の頭髮に粉状の薬剤を浴びせたり、市街地に空中撒布することもあった。その後、農業用の殺虫剤として利用されたが、1960年代に出版されたレイチェル・カーソンの「沈黙の春」により取り上げられ、その残留毒性の危険が世界に広く広まり、日本でも1971年に使用が禁止になった。

レイチェルの別荘がアメリカの東海岸のメイン州にあったんです。写真を見ると別荘といっても小屋のようなものですが、自然が好きなので毎年そこに行って春を体験していた。

ところがある年、何かがおかしい。あったものが無くなっていた。何かがおかしい。それは池には魚が跳ね、チョウチョが飛び、鳥がさえずっていた。それがいなくなっていた。それで「サイレント・スプリング」＝「沈黙の春」です。

私が目にしたのは1970年代。そのときに「化学農薬のおかげで」ということで、メーカーと政府は善の物としてやっているけど、実はそうではなかった。例えば1ppm、つまり100

万分の1の濃度だから安全と言う。しかし、そうではないとレイチェルは解き明かしていく。地上に舞い降りた化学物質は無くならない。つまり、土中に染みこんだ化学物質が苔などに吸い込まれる。水に混じって溶けた物を毎年吸い続ける。それによって1ppmが10ppm、100ppmと濃くなっていく。「※生物濃縮」と言います。

「※生物濃縮」…最初は低い濃度であった化学物質が、生態系の中の食物連鎖を通してしだいに濃縮されていく現象。アメリカで DDT が水→プランクトン→魚→鳥の食物連鎖の過程ごとに数百倍から数千倍ずつ濃縮され、食物連鎖の頂点の鳥類に高濃度で検出され、これが卵殻形成を妨げたり、その種の鳥の死滅を招いた。

生きるということ食べ続けるということ。自然界には無かったものだから、生き物としてはどうにもならない。我々は自分で生きているようでそうではなくて、体は生きるために熱を出すし、心臓も自分で動かそうとしているんじゃないかと自然に動く。自分でやっているのではなく、生かされているんです。汗腺、体温管理などもそう。

我々は生物学者に言わせれば30億の歴史を経て今の命がある。我々の体は生かされている。何万年の間で人間の体は変わっていない。1万年前と今は遺伝子レベルではほとんど変わっていないそうです。だから弱いのは淘汰されていく。縄文時代は5人生まれて大人になるのは1.5人ぐらいだったそうですね。そういう中で環境に耐えられる者が生き残った。だから自然のものであればいらぬものを外に排出出来た。

しかし、今まで無かった化学物質は体が細胞レベルではどうしようも出来ない。しかも生物濃縮。しかもそれを食う者もいる。最後の捕食者が人間。生物濃縮は物によっては万倍にもなる。0.1ppm→1mmg→人間に障害が出るレベル、となっていく。端的に出たのが水俣病。水銀を人間の体が対応出来ない。そういったものが今も沢山あるでしょ。だからこれからの時代はどうなるかわからないよね。

何の話をしていたんだっけ？(笑)話を戻して、1960年代にレイチェルが沈黙の春を発表したわけですが、その頃は「※緑の革命」とも言われた。つまり化学肥料、農業の機械化。私の世代は最初にそういう教育を受けた人間。「これから農家も経営者だ。効率よい仕事をしろ」と言われた。

「※緑の革命」…1940年代から1960年代にかけて、高収量品種の導入や化学肥料の大量投入などにより穀物の生産性が向上し、穀物の大量増産をしたことを指す。品種によっては反収量は2倍以上に増大したものがあるが、在来種に比べ洪水や病虫害に弱く収量が伸びないものもあり、アジア各国の国内における貧富の差はかえって拡大したという人もいる。

それまで畑を作るには落ち葉や草を積んで肥料にして入れていた。堆肥は1トン、2トンというレベル。1反歩1トン~2トン入れる、となるが、化学肥料なら軽いし10分もあれば振れちゃう。

また、堆肥は出来るのに1年間かかる。化学肥料より時間を食うわけです。だから「もっと効率的に！」となる。だけど、仲間と話して「でも違うよな。じいさん、親父がやってきた

ことは間違いないよな。化学肥料は今までの先代が積み上げてきた土があるから効くんだよな」と言っていたんです。そういうのに変わってきたにしても、こんな農業で良いのか？と

つまり3つの問題ですね。化学農薬、化学肥料、機械化。化学肥料で土は育つのか？土ってわかりますよね？地球の表土は平均15~17cmぐらいしかない。表土=耕土。試しに海の砂に種を蒔いてみても芽は出るけど育たないのです。海の砂では畑の土と全く違うんです。砂=鉱物微細なもの。一方、土=種が目を出し花を咲かし種をつける。

地球平均でそういった土は20cmとされています。学者の説は色々あるんですが、30cmの土が出来るのに1000年かかると言われている。秋田大学の先生が、この辺のナラ、クヌギ、つまり落葉樹が1ヘクタールに落とす葉っぱの量は3~5トンとのこと。それをみみずやオケラが食む。つまり小動物によって分解される。そのウンチを微生物が食べる。つまり植物が土を作るんです。そういったことを日本では全く教えないよね。

私が恩師である岩手大学の石川先生に教えてもらったのですが、ドイツのベルリンでは「表土30cmは埋め込んではいならない」という条例があるんだそうです。日本では埋めちゃうでしょ？100年かけて30cm、100年でも10cmとも言う人もいます。人道的には作れない。そういうことで土を大事にしていく。

アメリカでは国土保全庁があるんです。アメリカは半砂漠や山脈、風雨などで土が流されてしまう。アメリカの平均耕土は平均17cmとされているんです。で、21世紀になる前には人口は3億人を超える。それまでに食糧を自給出来る体制にする。そのために土地、経営体、そして国土を50年計画で保全するための政府機関です。風や洪水でとばされない計画です。そういったことは日本は全くしていないですよ。

また、経営体に対する保護政策も違いますね。ある基準の収入まで下がったら政府が直接補填する。シカゴ相場でやったらアメリカの農家はつぶれちゃう。だから政府は直接補助をする。ヨーロッパの予算の60%は農業予算。食べ物をきちんと守ろうとしている。

何の話でしたっけ？(笑)あぁ、レイチェルですね。レイチェルは「核と農薬は同じ」と言ったんです。福島原発の核処理でもそうですが、今も見にいけないのよ。見に行くと死んじゃうのよ。

で1960~70年代、団塊の世代の中の人達で「これで良いのか？」という人達が出てきた。化学物質は環境に放出したら取れない。なんとかしないと、後世の50年後、100年後にきちんとした環境を残せない。持続性のある農業をするべきだ。それが有機農業の始まりです。

もう1つ聞いておいてもらいたいのですが、テクノロジーというものの特性ですね。50年前に施設園芸、温室、ビニールハウスが流行ったんです。冬にトマトを食べるといのは、それを作るにはトマトに100kcalとるのにエネルギーは100倍。つまり持続的では無いんです。地球は有限なのですが、100しかないエネルギーを1万calでとるのは辻褄が合わない。

お金のやりとり面ではあっても、地球の総エネルギーの観点では合わない。そこが有機農業の原点。

■おかげさま農場の原点

同時に私達の命はどこからくるのか？自分たちを害する物を使っていて良いのか？我々も生態系に入っているのに。食べ物、命を考える農業をすべきじゃないか、ということでおかげさま農場を作ったんです。

おかげさまの意味わかる？何より自然の恵みに感謝ということですね。「※無着成恭」を知っていますか？昭和26年、教師になったんです。子供電話相談室とか社会活動をしてきた方で、お寺の畑を奥さんがおかげさま農場と名付けたのですが、そこから頂いた名です。

「※無着成恭」…1927年生まれ。禅宗の僧侶で日本の教育者で高柳さんの師の1人です。山形の中学校の教師時代の生徒の生活記録文を編集した『山びこ学校』が著名で、『全国こども電話相談室』の回答者も長年務めた。高柳さんが師と仰ぐ存在で、1987年から隣町の多古町のお寺の住職になり、三十年の間、親交がある。乞われて九州のお寺に在職していたが、今は多古町に戻って余生を過ごしています。

私が30代の半ば、何もしない時期があったんです。人間は地球の害虫だから何もしない方が良いつて(笑)。それで生きていける体制を整えたんです。当時、我が家は10に家族だったのですが、味噌、醤油、米の必要量を確保すれば生きて行けるって。そしたら「高柳さん、何やってるの！」と叱咤されたんです(笑)

永六輔って知ってる？永六輔と無着さん、2人ともお寺のせがれなんです。江戸紫、ご飯ですよ、っていう海苔の佃煮、ありましたよねあれの関係で、永六輔がお客さんを連れて福泉寺に来た。それで、私がこんな話をしていると「その野菜をどこで手に入れば良いですか？」って聞かれて、私は困惑してしまった(笑)「とりあえず、生協で。。」と言っていたら叱られてしまった(笑)で、窓口だけでも作ろうか、ということでおかげさま農場を作ったんです。

半分は仕事のためだけけど半分は運動ですね。全共闘時代は運動なんだよ。良い事は広めようというね。

30年やってきて「この日本という国はなんて国だろう！」と思っていた。根本的なことがわかっていない、とすることをわかっていない。自分の命のこと、食うことについてわかってない。無着先生が「この国は農業を教えないと決めた国」と聞いて、あ〜、なるほど」と腑に落ちたんです。

1961年、学力テストが始まったんですそして1962年に「※農業基本法」が制定され、数年後の「この国は経済で生きていく」と決めた。だから学校で農業を教えない。1960年代、私らの教科書には「春に種を蒔き秋に実りを待つのです」といった事が載っていたんですが。工業的發展になってしまった。「育つ、育てられるというのは世の中をどう見るかに繋がる」

と無着生成が言っていたな～。

「※農業基本法」…高度経済成長により農業と他産業との生産性や生活水準の格差が広がったものを是正することを目的に昭和 36 年に制定された法律。需要があるものに農産物を集中させるいわゆる「選択的拡大」を推進し、農業構造の改善(農業経営の規模の拡大、農地の集団化、家畜の導入、機械化その他農地保有の合理化及び農業経営の近代化)を推進した。1999 年、食料・農業・農村基本法(新基本法)の施行によって廃止された。

■現場＝体験が大事

この教室は一定の体験をして頂いて「こうなんだ」と体験しながら学んで頂ければと思います。私は仏教徒なのですが、キリスト教にも「求めよ、さらば与えられん」とありますよね。求めてきたんでみなさんは大丈夫でしょうが、テレビとか見ていたら駄目だな～。サプリメントとかばっかり。日本人は統制されたいんだらうね。マスクしたい人はすれば良いんです。でもしていない人は駄目だ、というのよね。

現場を知っている人、さっきの牛乳でいえば飲んだことがある人だからわかる。飲んだこと無い人は本物かどうかわからない。それは現場が大事だと思います。

もうちょっと有機農業の意味を言ってしまうと、人間が薬で育って健康とは言えないじゃないですか？作物も薬によって育てられたものを健康と言えないでしょう？人間が食べる物なら自然の力で育ったものを頂くのが良いのではないかと、というのが自然と思うんです。

だから無農薬が目的ではないんです。命が正常に発現しているのか？正当な野菜やお米、例えばウイルスが入ってくると白血球とリンパ球が働く。新潟大学の安保先生の話では、顆粒球は細菌を食う、ウイルスはその何十分の 1、それをやっつけるのがリンパ球。興奮しやすい人は顆粒球が強くないそうです。おだやかな人はリンパ球が多くなる。無用にストレスをためず心を落ち着かせるのが大事ですよ。

我々の体は常にウイルスに冒されているんです。今、千葉県では鳥インフルエンザが蔓延しているんですが、千葉県全体の 1200 万羽のうち約 500 万羽も殺処分されているんです。10 都府県に鳥インフルエンザが出ていますが、あれも密飼いが原因だね。隣の多古町では処分仕切れないから自衛隊が派遣されているよね。豚も牛も 4～5 年前に細菌にかかったよね。

どれも本来の自然から離れている世界を作っているのが原因だと思います。そして人間が今の生き様をしている限り変わらないですよ。昔、健康になる食べ物、正しい食べ物はありますか？と無着先生に聞いたら、「生きている食べ物を食べよ」と教えてくれたんです。みんな死んだ物を食べているからね。